




ふるさと納税の主な活用事業

 子育て・教育	<ul style="list-style-type: none"> ・認定こども園保育料の完全無料化 ・認定こども園遠距離通園者の送迎費用の助成 ・小学校の少人数学習環境の整備、心のケアを図るための教職員の配置 ・子ども医療費を高校世代まで無料化 など
 医療・福祉など	<ul style="list-style-type: none"> ・地域包括ケア等推進費 ・障がい者への地域生活支援費 ・妊娠中の健康診査経費・交通費の助成 など
 商工・観光 農林業など	<ul style="list-style-type: none"> ・移住定住促進のための生活体験用住宅整備や首都圏プロモーション活動費 ・新規等創業への費用 ・農業用GPSガイダンスシステム等の導入経費への助成 など

ふるさと納税を住民に還元
「住みやすい町」として人口増

町ではふるさと納税で受ける寄付金の活用について、HPや「ふるさとチョイス」などで明示しており、受けた寄付金については、「住みやすい町」の実現のため、主に「子育て・教育」「保健・医療・福祉・介護」に活用しています。

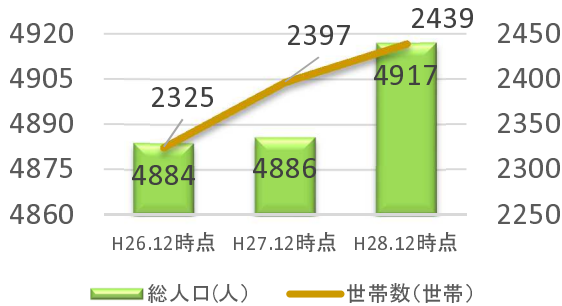
例えば、保護者の負担軽減を目的とした認定こども園の保育料完全無料化や高校生世代までの子ども医療費無料化といった未来を担う子どもたちをしつかりと生み、育てることができる事業へと充実しているほか、上士幌版「生涯活躍のまち」を推進するための事業や移住定住促進に向けた事業へも充当されています。

寄付金を活用し、「住みやすい町」の実現に向けたこうした取組の成果もあり、平成28年における上士幌町の人口は平成26年に比べて33人増加し、平成29年においても1月から10月までで既に49人増加しています。



ふるさと納税を活用して設置された認定こども園「ほろん」保護者の負担軽減のため保育料を完全無料化した。

町の総人口と世帯数の推移



地方の発展に向け
さらなる可能性を追求

これまで約15年間に渡って続けてきたICTを活用した町の情報発信の取組は全国の上士幌町の支援者を徐々に増やし、その結果、ふるさと納税による多額の寄付につながりました。

そして今新たな展開を迎えています。町では、平成28年度から、テレワークを行う企業の誘致を始めました。既に「ふるさとチョイス」の運営会社である(株)トラスティバンクが問合せ窓口機能の一部を上士幌町に移し、本社社員を派遣するほか、町内からは4人のアルバイトが採用されました。寄付金を活用し、子育て支援を始めとしたまちづくりへの取組が町への進出の決め手となりました。

また、(株)トラスティバンクなどで、地域活性とロボット関連技術の発展を目的とした「Japan Innovation Challenge」を平成28年度から実施し、ドローンやロボットによる遭難救助や自動運転バスの実証実験など、地域を支える新たな技術の発展と振興のための支援もしています。



「Japan Innovation Challenge 2017」から自動運転バスに乗り込む住民(上)と遭難救助ドローンを操作する大会参加者(下)

【上士幌町】ICT等活用の歩みと出来事

平成28年	平成27年	平成25年	平成24年	平成23年	平成22年	平成20年	平成16年	平成14年	平成13年
テレワーク実施企業の誘致活動を開始 「Japan Innovation Challenge」の実施を開始	ふるさと納税寄付者との交流イベント(東京)を開始	ふるさと納税入力フォームの改善、クレジット決済導入 ※ふるさと納税の寄付額が2億円を超える	「ふるさとチョイス」に参加	HPの全面リニューアル(スマートフォン対応など)フェイスクック開始	情報交流推進員の採用 上士幌コンシェルジュの設立 通信販売サイト「十勝かみしほろん市場」の開設	ブログポータルサイト「かみしほろん.com」開始	HPのリニューアル(独自CMSの導入)	情報交流推進室設置	竹中氏が町長に就任

町では、引き続き、ICTを活用した情報発信やテレワークなどの都市と地方をつなぐ「しごと」の創出、移住定住などの取組を推進していくとともに、現在、町の課題となっている一部地域のブロードバンド環境の改善に向けて国と検討を行っていくこととしています。

※「生涯活躍のまち」…中高年齢者が希望に応じて「地方」や「まちなか」に移り住み、地域の住民と交流しながら、健康でアクティブな生活を送り、医療・介護が必要な時には継続的にケアを受けることができる「まち」

トップの想い

昨今の人口減少や少子高齢化、情報化は、およそ40年前から既にリアルな将来像として国や地方自治体、有識者が認識していたことであり、そういった中で人口減少を最小限に食い止め、地域の活力を発展させながら持続させるためには、どのようにしてヒト・モノで都市とつながるかが大変重要になってきます。

都市への人口集中が進む中で、地方と都市をつなぐツールがICTであり、私は町長になった当初から政策実現のためにはICTを最大限に活用することを念頭においていました。

とにかく情報というものは

陳腐化が激しい。

現在はほとんど

の自治体がSNSを

活用していますが、大事なのは情報の更新とユーザーが求めている情報をこのように掲載するかだと思います。

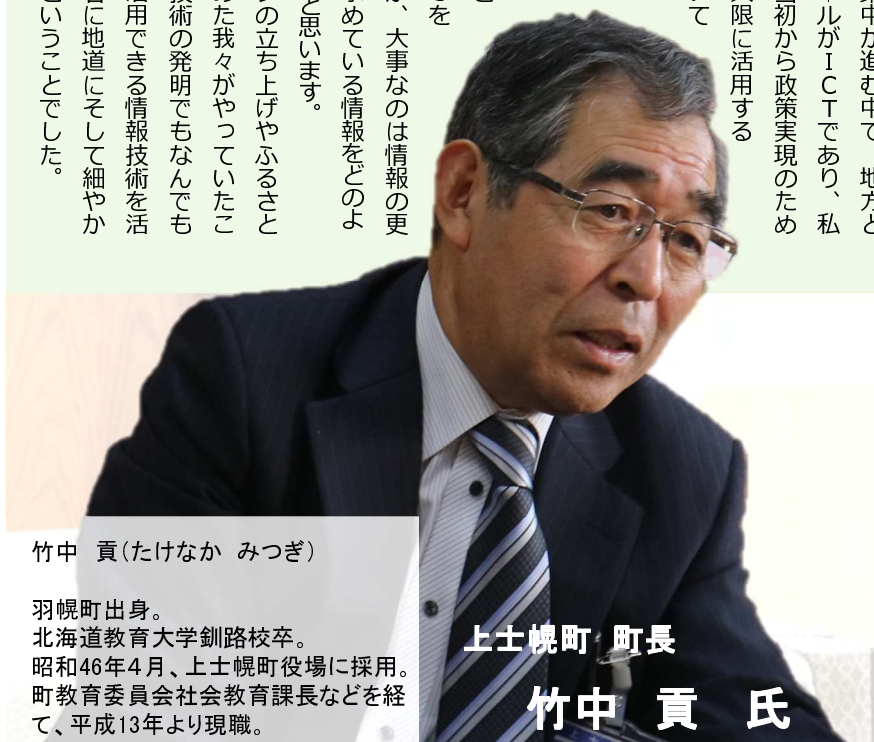
道内初のブログの立ち上げやふるさと

納税で注目を集めた我々がやっていたことは、革新的な技術の発明でもなんでもなく、その時に活用できる情報技術を活用し、町の支援者に地道にそして細やかに情報発信することでした。

町長が語るICTの重要性

ICTの時代というのは、今、世界的にも大きな潮流になっています。

こういった時代の中で、地方が取り残されるということではなく、グローバルな社会の中で、ICTを駆使し、我々の持つローカル性を強みとして存在感を發揮していくことが、これからの地方のあり方につながるものと思います。



上士幌町 町長

竹中 貢 氏

竹中 貢(たけなか みつぎ)

羽幌町出身。北海道教育大学釧路校卒。昭和46年4月、上士幌町役場に採用。町教育委員会社会教育課長などを経て、平成13年より現職。

町内民間企業によるICT活用の取組～ノベルズグループの取組～

pick up



株式会社ノベルズ
情報システム部 部長
西谷 哲也 氏



ノベルズグループ

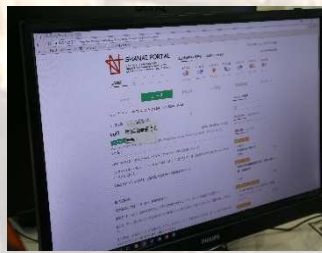
上士幌町出身である延與雄一郎氏が平成18年に同町に株式会社ノベルズを設立したのが始まり。十勝地方を拠点に、肉牛・酪農・食品事業を手がける。上士幌町のノベルズ本社のほか、道内に8牧場を有し、肉牛事業においては生産、繁殖、育成、肥育の一括管理システムを導入。同社の「十勝ハーブ牛」は上士幌町の「ふるさと納税」返礼品としても高い人気を誇る。

スタッフ間の「共通理解」と「やりとりの円滑化」を強化

我々ノベルズは肉牛、酪農、食品の3事業を行っており、従業員数は約300名となっております。また、上士幌町のほか、足寄町や標茶町、東京都や奈良県に牧場や事務所などを有しています。

企業として、業務効率の向上やリスクの軽減のためには、このように様々な場所にいる数多くのスタッフが同じ認識のもと、一丸となって業務を行うことが大切です。そこで、スタッフ同士の共通理解を図るため、我々は社内ポータルサイトを立ち上げました。

このサイトには、各牧場や事務所などの情報が掲載されているほか、全職員



社内ポータルサイトの画面。各牧場や事務所のトピックのほか、新規採用者の写真やインタビューなどが掲載されている。サイトの立ち上げ時には、コンテンツの内容や配置など、どのようにすればスタッフが見やすいかを工夫し、現在に至る。

そして、離れた牧場や事業所間の双方向のコミュニケーションを円滑化にするために昨年度から導入したのはテレビ会議システムです。これを導入したことにより、これまで電話でのやりとりで伝わりづらかった内容もスムーズに相手に伝えることができるようになりました。現在、ほぼ毎日使用予約で埋まっています。



テレビ会議システムの画面。大きな画面がやりとりの相手方、右上の小さな画面が自分達を映している。2者間だけでなく、複数の事務所間で使用可能であり、その場合は画面が増える仕組み。



そうや 宗谷ひと図鑑事業



高校生が地域の魅力を再発見

子どもたちに将来も地元に住み続けたいと考えてもらうために、北海道^{そうや}宗谷総合振興局では「移住・定住推進事業」の一環として、宗谷地域の高校生が地域の魅力的な人取材し、その内容を「宗谷ひと図鑑」として冊子にまとめることにより、地域の魅力への理解促進に取り組んでいます。

取組のきっかけ



宗谷地域は、道内でも人口減少率が高く、特に若年層の人口流出が深刻な課題となっています。管内には大学が1校しかなく、選択できる職業も都市部と比較すると少ないこともあり、高校卒業後は、進学や就職で宗谷地域を離れる子どもたちが多くなっています。長い期間地元を離れ、都市部での生活に慣れるにつれて、地域とは疎遠になり、結果として宗谷管内に戻る機会を逸してしまう状況にあります。

こうした状況を解消するため、地元の高校生が自身の進路を考える大切な時期に「地域の魅力」を知ることが定住や将来のUターンにつながるのではないかと考えたことが取組を始めたきっかけです。

しかしながら、若い世代に宗谷地域の魅力をどのようにしてPRするのは難しい問題でした。

宗谷地域ですぐ思い浮かぶものといえば、「宗谷岬」や「利尻島・礼文島」といった観光地や「ホタテ」、「昆布」、「乳製品」といった美味しい特産品ですが、子どもたちが将来も住み続けたいと考えるために大切なのは、生まれ育ったまちに、どのような「しごと」がある

のかを理解し、地域で誇りを持って働く「ひと」の姿を学ぶことだと考え、宗谷総合振興局では「宗谷ひと図鑑」に取り組むこととしました。

地域の「ひと」を知る 郷土愛の醸成



この取組は宗谷管内の高校生が、地域の魅力的な「ひと」を自分達で見つけ、本人にインタビューを行い、その内容を「ひと図鑑」として冊子にまとめるとともに、完成した「ひと図鑑」を活用して、首都圏等で自らが地域のPRなどを行います。

こうした一連の活動を通して、地域の魅力を再認識し、郷土愛を育むことで、定住や一旦地域を離れても将来的には地元に戻りたいといった意識の醸成を期待しています。

宗谷管内には、高校が7校（稚内、稚内大谷、浜頓別、枝幸、豊富、礼文、利尻）あり、各校の協力を得て、全ての高校でこの取組を実施することになりました。平成27年度から、これまで4校、生徒71名が参加し、「宗谷ひと図鑑」を2巻発行しました。今年度は、稚内、稚内大谷、豊富各高校の生徒51名が参加し、本年12月に「宗谷ひと図鑑03」を発行する予定です。



▲稚内市議会事務局の工藤事務局長に取材する様子

「宗谷ひと図鑑」を作成するにあたって、高校生達は、取材はもとより、インタビューの仕方や誌面の作成などについて、ワークショップにより学びます。

1回目のワークショップでは、高校生達をグループ分けし、編集長やイラストレーター、ライターなど役割分担を決めるとともに、地域の誰を取材するか話し合います。また、カメラマンやデザイナーといった専門家の方々から、話の聴き方やメモの取り方、写真撮影といった取材方法について学びとともに、冊子の仕上りをイメージしながら質問内容を固めていきます。最後にインタビューの練習を行って、いよいよ本番に望みます。

「宗谷ひと図鑑」ができるまで



▲ワークショップで誌面構成を考えている生徒の様子

地域の方々へのインタビューでは、大半の高校生が初体験なので、緊張して事前に準備した質問をすることで一杯でしたが、取材を受けた方々が、子どもたちの一生懸命さを感じ取り、逆に場を和ませてくれる場面もありました。

取材相手と次第に打ち解けていく中で、取材対象者の生い立ちや仕事の苦労話、地域への思いなど、貴重なお話の時には、高校生達は特に真剣に耳を傾けていました。

インタビューが終わった後は、原稿作成に取りかかります。2回目のワークショップでは、高校生がインタビューのメモや写真、イラストなどを組み合わせて、取材対象者の魅力を伝える誌面を作成します。こうして、手作り感あふれる誌面を印刷・製本し、「宗谷ひと図鑑」が完成します。



▲「宗谷ひと図鑑」の表紙と誌面

完成した「宗谷ひと図鑑」は、宗谷地域の学校や公共機関のほか、首都圏での移住イベント等で配付を行うなど、様々な方への周知に努めています。

取組への反応



参加した高校生からは、「私達が生まれ育った地域はとても魅力的であると再認識できた」、「地域の歴史や魅力、温かい人々に触れる良い機会となった」、「私達が大人になっても住んでいる人達の温かさや優しさが変わらない地域であってほしい」といった声が聞かれるなど、地域の魅力を再認識し、郷土愛を深めるきっかけとなったようです。

また、地域の方々からは「子どもたちから改めて地域の魅力を教わった」、「本当に良い取組であり、他の地域でも実施すべき」といった反応をいただきました。

地方における若年層の社会減は、一朝一夕で解決する問題ではありませんが、宗谷総合振興局としては、引き続き「宗谷ひと図鑑」のような定住・移住促進に向けた取組を進め、地方創生につなげていきたいと考えています。



宗谷ひと図鑑 Web版QR